

Faulknerの作品における孤独の問題

小島良一

I

小説や詩に限らず、物を書くという行為は作家の孤独な自我と想像力との葛藤であり、そこから産み出される作品は多かれ少なかれ孤独の影を帯びている。FaulknerはVirginia大学での彼の作品等に関する質疑応答の中で、作家の生活は「孤独」(‘lonely’)ではないかとの質問を受け、それに対しFaulknerは、むしろ「孤独」とは言っても‘solitary’の方ではないかと答え、‘loneliness’と‘solitude’には意味の違いがあるのではないかと答えている。(Gwynn and Blotner 111) ‘loneliness’には、周囲には誰もいずに、一抹の寂しさが心の中に忍び寄ってくるという響きがあるが、恐らくFaulknerは‘solitary’という言葉によって、作品に取り組んでいる時には周りには誰もいないが、だからといって心が寂しいわけではない、むしろその孤独な状況を自ら選択しているということを強調したかったのだろうと思われる。¹ 今回のテーマである「孤独」(‘isolation’)という言葉にはどこかこの2つの言葉のニュアンスがどちらも含まれているように思われる。Go Down, Moses、特にその作品の中に収められた“The Bear”におけるIke (Issac) McCaslin、Light in AugustのJoe Christmas、The Sound and the FuryのQuentin Compsonといった登場人物たちは、自分の葛藤ゆえに他人を遠ざける場合、或いは自分の信条ゆえに一般通念とは程遠い行為をすることで、周囲の人間とは距離が離れてしまう場合など、「孤独」や「孤立」を取り巻く状況は様々である。しかし、南部というアメリカでも「特殊」な地域とそうした登場人物たちとの関係を考えてみると、登場人物各々の抱える個別的な

問題が一つの問題に収斂していくように思われる。本稿では作品が書かれた年代順にそれぞれの登場人物たちが孤立していく内的・外的要因を考察し、さらに彼らの孤独と孤立の根底にある共通の問題について指摘したいと思う。

II

*The Sound and the Fury*はFaulknerの作品の中でも最も難解だと言われる。それは4つのセクションのうち3つのセクションが各々Benjy, Quentin, JasonというCompson家の兄弟たちによって一人称で語られ、登場人物に関する作者の客観的な記述やストーリーの状況説明が全く記述されないからであり、それに加えて「意識の流れ」の手法が用いられているために、時間が直線的に一方方向に流れないからである。それによって、読者は3人の目に映る像やそれに対する反応や意識を通して、登場人物の性格、考え方、家族に関する情報などを読み取らなければならない。しかも、物語の全体像を把握するためには、読み通した後で読者は物語の再構築を迫られる。更にFaulknerの作品の中でもとりわけイメージやシンボルが多用され、それらが複雑に絡み合うせいで作品全体が錯綜としていることも、この作品を難解にしている一つの要因である。

第1セクションは1928年4月7日、33歳になる白痴のBenjyがゴルファーの発する“caddie”という声に反応して呻き声をあげるところから始まる。読者はBenjyが不在の姉の“Caddy”を連想して呻き声をあげたことをこの時点で知ることはできない。Benjyは外に向かって発することのできる言葉を持たず、ただ感情を表現する手段として呻き声を発することができるだけである。彼には時間の概念もなく、記憶も過去と現在という時間的配列とは無関係に蘇ってくる。現在の状況を判断したり解釈したりすることが

できないので、読者は彼の目に映し出されるイメージによって徐々に Compson 家の家族構成や人間関係を知ることができるようになる。第2セクションは、Compson 家の長男 Quentin の 1910年6月2日の川に身を投じて自殺をするまでの独白である。Quentin が頭脳明晰で苦悩や絶望感を抱いているせいで、このセクションは前半の3つのセクションの中でも最も複雑であり、第1セクションの Benjy の目を通して見た Compson 家が、Quentin の病的とも言える主観や判断、妄想と言った要素によって、より錯綜とした様相を呈している。第3セクションは次男 Jason の 1928年4月6日の独白であり、俗物的性格からか、独白は Quentin の章とは対照的に、ただ目に見える対象を追いかけている印象を与える。最後の章は作者の客観的な視点から三人称で Compson 家の物語が進行する。ここでは主に Quentin の「時間へのこだわり」、「過去への固執」、「妹 Caddy に対する近親相姦願望」の3点に絞って考えてみたい。

Quentin は初めから時間に取り憑かれており、父親にもらった懐中時計の時を刻む音を聞いている。その時計は祖父から父親、父親から Quentin へと受け継がれたもので、父親はそれを Quentin に渡した理由を次のように述べる。

お前にすべての希望と欲望の墓場をやろう。お前はそれを使うことで、すべての人間経験の帰謬法を分るようになるだろうが、それもわたしやわたしの父親の必要性を満たさなかったのと同じように、お前の必要性も満たすことはないだろう。わたしがお前にこれをやるのは時間を意識して欲しいからじゃない。むしろたまにはしばらくそれを忘れるために、時間を征服しようとして人生を無駄にしないようにするためなんだよ。これまで時間と戦って勝ったものはいないんだから。いや、そんな戦いが行われたためしだってないんだから。戦場は人間の

愚劣さと絶望を教えるだけで、勝つなんて言うのは哲学者と馬鹿者の妄想なんだ。(SAF76)²

Quentinの父親は既に人生を諦め、祖父が築いた富と名誉を守りきれずにアルコール中毒になっている、ある意味ではCompson家の凋落を招来した人物であり、Quentinの現実に適応できない性格は彼から受け継いだものと思われる。またQuentinは父親の言った、「キリストは磔刑になったんじゃないんだ、あの小さな歯車が刻むカチカチという音にくたびれ果ててしまったんだ。」と言う言葉を思い出すが、その直後から既に時間を意識し始め、「よしわかった。何時だか考えろ。考えろ。」と時間を意識する(SAF77)。「時間」は彼の強迫観念となり、死の間際まで彼につきまとう。彼が時間に取り憑かれるのは、過去を現在とうまく融合させることができないからである。

Quentinの時間の観念は純潔の観念と結びついている。彼は自分の家系に誇りを持っているが、彼がよりどころとしているのは祖父の時代のCompson家である。川で投身自殺をする直前に、Quentinは軍服を着た祖父とSartoris大佐が杉の林の向こうで話している声を聞き、言い争いをすると常に祖父が正しかったことを思い出している。彼はCompson家のこの古き良き時代を現在にも持ち込もうとするが、その過去を現在の中に活かすことができない。

Quentinの場合、Compson家の過去の伝統は、彼の純潔の観念と密接に結びついている。彼はその純潔を妹のCaddyに求めるが、彼女はDalton Amesと性的関係を結び、親の言いつけによって意に染まない結婚をしてしまう。彼の父親は「処女性を發明したのは男であって女ではない。それは死のようなものだ。」と述べているが、彼の過去がCaddyの処女性と結びついている以上、Quentinは過去への固執を父親に否定されたことになる(SAF96)。

妹が現実には純潔を失った後、彼は妹の純潔を妄想という形で願い、清らかな焔に包まれて死ぬという願望を抱きながら川に身を投げる。彼は直線的に流れる物理的な時間と戦おうとしたが、結局は自分の主観的な過去への固執には抵抗できなかつたのである。Faulknerは『『あった』(‘was’) というようなものはなく、ただ『ある』(‘is’) というものが存在するだけであり、もし『あった』が存在したら、苦悩も嘆きもないはずだ。」と述べているが、Quentinはまさにこの‘was’の存在に抗しきれなかつたのである(Cowley 141)。

Jean-Paul SartreはFaulknerの作品の特質について、「小説家の美学は常に私たちが彼の形而上学に戻すのである。批評家の仕事は手法を評価する前に作家の形而上学を明らかにすることである。そしてフォークナーの作品が時間の形而上学であることは明白である。…時間に閉じこめられるのは人間の不幸である。」と述べている(Sartre 226)。更にSartreはFaulkner自身が時間に囚われた「敗北者」(‘a lost man’)だという見解を述べているが、時間に囚われているのはQuentinであり、作者ではないことは明らかである。

Quentinの絶望は、南北戦争後に南部人が直面した苦悩を象徴しているように思われる。南部社会が奴隷制度という体制に基づいて築かれた以上、その土台が揺らげば社会だけではなく、その体制を維持してきた人々の心理にも当然影響は及ぶはずである。Quentinが理想としてきた祖父の時代のCompson家も白人優位の南部貴族社会があったからこそ家への誇りを持ち続けることができた。南北戦争が終結してからほぼ半世紀経過していた時期にもかかわらず、歴史の流れと価値観の変化にQuentinは適応できなかつたのであり、自分を解放するには物理的な時間を止め、Caddyと共に焔に包まれて死ぬことによって永遠の生命を勝ち取る以外に道はなかつたのである。

III

*Light in August*の登場人物はほとんどが逃亡者や隠遁者という「よそ者」であり、Jeffersonと言う共同体には属していない部外者である。Joe Christmasはもちろんのこと、Lena Grove、Joanna Burden、Byron Bunch、Gail Hightower、Lucas Burch、Simon McEachernなど、登場人物はすべてJeffersonの外からやって来た人たちであり、町の人々から受け入れられる度合いにそれぞれ違いはあるものの、Jeffersonの人々とは人間的な関係をほとんど持っていない。それに伴って、作品の構造自体もLena GroveにまつわるプロットとJoe Christmasのプロットではほとんど接点がないまま、2つのストーリーが並行して進行する。

作品はLena Groveが恋人Lucas Burchを探しに旅を続けているゆったりとした場面で始まる。彼女はLucasの子供を宿し、歩いてMississippiまでやってくる。Faulknerはインタビューの中で、Mississippi州での八月の光が、ギリシャのサテュロスやオリnposの山々から射し込んでくる光に似ているに違いないと述べ、キリスト教文明よりも古い時代の輝きを思い出させ、あらゆるものを受け容れることのできるLena Groveのイメージと結びつくだろう、と述べている (Gwynn and Blotner 199)。Lena Groveは最終的には恋人との再会を果たすことはできないが、作品の中では数少ない良心的なByron Bunchとの新しい旅立ちを示唆する、生命力に満ちた豊饒のイメージを与えられている。彼女には他人への猜疑心はなく、未婚のまま子供を宿した自分自身に対する自己嫌悪も全くない、正に人間肯定を体現している。

このLena Groveのストーリーと並行して進行するのが、彼女とは全く対照的なJoe Christmasの物語である。彼には家族はなく、天涯孤独の身である。彼は自分の中に黒人の血が混じっていると聞かされてきたが、それに関する確たる証拠は作品には見当たらない。彼はその自分のアイデンティ

ティに苦悩し、破滅的な行為を行い、最後には南部のファシストとも言える Percy Grimm によって去勢され、殺されてしまう。

彼の人格形成に大きな影響を及ぼした一人は、彼の狂信的な祖父 Doc Hines である。彼は暮らしのほとんどを黒人の恵みと慈善に頼っているが、一人で遠くの黒人教会まで出かけ、猥褻な言葉を織り交ぜながら白人優位説を説き、揚げ句の果てに教会で黒人をピストルで脅して刑務所に収監される。Hines は自分の行動をすべて神の名の下に正当化する。メキシコ人と駆け落ちをして身籠もった娘の Milly が出産の時、彼は医者を呼ばずに娘を死なせてしまう。娘の相手のメキシコ人は黒人との混血だと信じ込んでいる彼は、生まれた Christmas を孤児院に入れ、彼が黒人との混血だという噂を自ら流し、Christmas が周囲から「黒ん坊」(‘nigger’) と呼ばれるのを聞いて密かに喜びを感じる愚劣極まりない狂信者である。Doc Hines の行為は Christmas の中に劣等感や自己嫌悪、それに女性に対する嫌悪感を植え付けた。

Christmas は後に厳格なカルヴィニストである Simon McEachern に引取られる。彼は「生まれはどうかであろうと、神を恐れ、怠惰と虚栄を嫌う人間になること」を信条とし、‘Christmas’ という名前が神への冒瀆であるとして、彼の名前を変えようとする (LIA 143)。更に教義を教えながら Christmas を殴りつけるなど、彼も Doc Hines と並んで Christmas の凶暴な性格形成に一役買っている。Christmas の苦悩は人種差別が一般的な当時の南部社会における白人か黒人かというアイデンティティの問題であり、自分の人間としての実体への疑念である。ただ、彼の精神構造は白人に服従する黒人のそれと同列には扱えない。彼は祖父や McEachern によって、人種主義や男性優位、或いは後の彼の行動を考えると、女性蔑視という考え方までを吹き込まれている。André Bleikasten も指摘するように、彼は人種主義者であり、性差別主義者であり、またピューリタンでもある (Bleikasten 84)。

第 6 章の冒頭に、「認識力が記憶できるようになる前に、記憶力は働き

だす。」と書かれているように、Christmasの現在の行動はすべてそれまでの過去によって規定されている（LIA 119）。Christmasは5人の仲間と共に黒人女性を輪姦しようとするが、自分が黒人であると罵倒され続けてきた過去への苛立ちと現在の自分への嫌悪感によって彼女を蹴飛ばしてしまう。また、Christmasは仲間の一人から、「それは月に一度やってくるものなんだ。」という生理の話を知ると、殺した羊の暖かい血に手を浸す異常な反応を示す（LIA 185）。ChristmasはBobbie Allenという給仕女に恋をするが、彼女が女性の生理のことを話すと彼女を殴って走り去ってしまう。彼の歪んだ性に対する感覚と狂気、それに女性蔑視を端的に表しているのはJoanna Burdenとの情事の結末である。彼女の先祖は1867年頃にNew HampshireからJeffersonに移り住んできた、厳格なカルヴィニストの家系に属する。彼女は黒人を次のように見ている。

わたしはすべての白人の子供は息をする前からいつも黒い影を背負って生まれてくるんだと思っていたわ。わたしには黒い影が十字架の形に見えたの。それに白人の赤ん坊は息をする前でさえその影から逃れるためにもがいているように見えた。その影が赤ん坊の上だけじゃなくて下にもあって、赤ん坊たちが十字架にかけられたみたいに、両腕を広げているみたいに広がっていたの。（LIA 253）

彼女はピューリタンの罪意識から黒人の存在を呪いと見ているが、逆に黒人との混血と言われているChristmasとの情事に没頭するようになる。Christmasには潜在的に同性性欲倒錯症があることが示唆されており、男性のような性格の彼女が女性性に目覚めると、彼は彼女の元を離れようとする。彼女が彼に跪いて祈りをするよう強制すると、彼は彼女を殺してしまう。彼はMottstownで逮捕されるが、監房から逃走し、その後州兵の士官

である Percy Grimm という白人優越主義者によって撃たれた拳銃の果てに去勢されて死んでしまう。

Christmas がこうした一連のグロテスクとも言える事件を引き起こす背景には、前述した厳格で歪んだピューリタニズムと人種問題が絡んでいる。彼は厳格且つ潔癖な南部の宗教がつくり出した自分の宿命から逃れようとし、更に自分が黒人であるというアイデンティティを払拭しようとしたが、結局は彼も、*The Sound and the Fury* の Quentin のように、過去からの宿命の呪縛からは逃れることができなかったのである。

IV

Go Down, Moses は McCaslin 家にまつわる人種問題と白人と黒人の混血の問題を扱った 5 世代にわたる小説である。作品には全部で 7 編の短編が収められ、それらが有機的な繋がりを持っている。中でも “The Bear” は Ike McCaslin の精神的発達と成熟を知る上で鍵になる作品であり、また作品全体のクライマックスとも言える作品である。Ike は Lucius Carothers McCaslin (1772-1837) を祖父とし、その息子である Theophilus (“Uncle Buck”) (1799-1879) と彼の妻 Sophonsiba Beauchamp との間に生まれた一人息子であり、白人の直系の遺産相続人でもある。しかし、彼は結果的に McCaslin 家の遺産相続を放棄する決心をする。従兄の McCaslin Edmonds は彼がそのような決心をした理由について全く理解できず、彼の妻も夫の決心に強く反発する。彼がこのような結論に至る理由を知るには、まず第一に、彼が森の中での狩猟の儀式に参加していく中で何を学び取っていったのか、第二に、“The Bear” の第 4 章における従兄の McCaslin Edmonds との会話がどのようなものだったのか、この二点について考えてみる必要がある。

16 歳になった時、Ike は当時大人たちによって年に一度の行事として行

われていた森の中での狩猟に参加する。彼に森での流儀を教え込むのは黒人奴隷とチカソー・インディアンの血を引くと言われている Sam Fathers である。森には大人たちが 'Old Ben' と呼ぶ大熊がおり、大人たちは年に一度のある時期に集まり、その大熊を実際に殺すことなく、大熊との儀式のような再会を長い間楽しんできた。Old Ben は神格化された畏怖すべき存在であり、大人たちは彼と彼の住む荒野に対して敬意を払っているからこそ、彼を決して殺したりはしない。³ Ike は Old Ben にその時点では一度も遭遇したことはなかったが、自然と感応する感性を既に持ち合わせていた。

彼は年老いた大熊を今まで一度も見ただことはなかったが、罠にかかって片足をだめにしてしまったその大熊の精神を既に受け継いでいたのだ。その大熊はほとんど 100 マイル四方にも渡る地域で、生きた人間と同じように、一つの名前、はっきりとした称号を自分の力で勝ち取っていたのだ。(GDM 185)

Faulkner が "The Bear" の冒頭で述べているように、Sam Fathers と Old Ben と雑種犬の Lion は、文明社会の付随物である「汚れ」の全くない、朽ち果てることのない力を備えている。森も太古の昔から変わらない、無垢な永遠の生命力を保っているようだ。

Ike は森での Old Ben との出会いを何度か期待するが、彼はなかなか姿を現さない。Sam Fathers は Ike に、「怖がるのは仕方がない。しかし、怯えてはいけない。お前が追いつめたり、お前が怯えていることを相手が嗅ぎつけさえしなければ、この森にはお前を傷つけたりするやつはいない。勇敢な人間が臆病者を怖がるのと同じように、熊や鹿だって臆病な人間を怖がらないはずはないからな。」と教え、Ike はその教えを次のように守る (GDM 198-99)。

彼はサムから教わったとおり、風上に向かうという正しいやり方で狩猟をしていた。しかし今はそんなことは問題ではなかった。彼は鉄砲を置いてきたのだ。自分の意志で自分を放棄し、先手をとるという作戦を受け入れず、ただ今まで侵されることのなかった人知れず存在してきた熊だけではなく、猟師と獲物との太古からの掟と均衡までが排除されてしまっている条件だけを受け入れていた。彼はもはや怯えることさえないのだ。たとえ恐怖が彼を、彼の皮膚もはらわたも骨も、自分の記憶になるはるか昔の記憶を完全につかんでしまう時であっても。それでも、今後70年間彼が追い続けるであろうこの熊とほかの熊、それに牡鹿と彼を区別する、か細いながらも明瞭なひるむことのない清澄さは失われることはないであろう。

(中略)

緑の薄暗がりか覆う果てしない荒野で、一人道に迷った子供のように、彼はしばらくの間立っていた。それから彼は完全に荒野に身を委ねた。時計と磁石のせいだった。彼にはまだ汚れがついていたのだ。彼は時計の鎖と輪になった磁石の紐を作業着から取り外し、それを灌木にかけ、その脇に棒きれを立てかけ、荒野に入っていった。

(中略)

その時彼は熊を見た。出てきたのでもなく、現れたのでもなかった。ただそこにいたのだ。緑の風のない午後の暑い光の中にじっと動かずに、夢に見たほどには大きくなかったが、予期していたほどに大きく、或いはそれ以上に大きく、まだらの薄暗がりを背景にして大きさは感じられないような姿で、彼を見ていたのだ。それから熊は動いた。空き地をゆったりと横切り、一瞬太陽のきらめきの中に足を踏み入れたかと思うとすぐに外に出て、再び立ち止まると振り返って肩越しに彼を見た。それから消えてしまった。それは森の中に入っていったとい

うのではない。動くことなくずっと荒野に沈み込んでいったのだ。まるで大きな年老いた鱈が鱗をぴくりとも動かさずに、暗い淵に沈んでいったかのようである。(GDM 198, 199, 200-201)

武器を携行せずに大熊の徘徊する自然の森に入れば、恐怖や孤独感がつきまとうのは当然だ。人間の作り出した鉄砲、時計、磁石といった汚れた文明の利器を自分から遠ざける行為は、太古から続いている無垢な自然の掟に対して Ike が示した敬意であり、荒野という自然の持つ摂理や秩序に適応していく理性や感性を研ぎ澄まそうそする Ike の積極的な姿勢でもある。それはまた Ike が生まれて初めて示した勇気であり、誇りであり、また謙譲でもある。彼がそれを示して初めて Old Ben が彼の前に姿を現したのは、彼を殺さない大人たちに Ike が同等の大人として仲間入りをしたことを表している。荒野はまた自由の象徴であり、そもそも人がそれを所有したり、売買したりするような代物ではないことを表しているようだ。年老いた熊が徘徊する荒野は Ike にとっての大学となり、その年老いた熊は彼の師となっていく。Ike は荒野でのこうした精神修養を通して、人間が生きていく上で最も大切な道徳や美徳、忍耐や愛、謙譲や誇りといった技量を身につけるが、こうした体験は現実社会での彼の後の行動と深く結びついている。

Ike が荒野での狩猟に参加するようになって 4 度目の夏に、狩猟のホストであり地主でもある De Spain 少佐の仔馬が何者かに襲われ、人々はそれが Old Ben の仕業ではないかと疑い始める。並の猟犬では Old Ben を到底追いつめることができないと感じていた Sam Fathers は「冷酷で、容赦のない、不屈の決意」をもった大型の犬、Lion を猟犬として飼い馴らし始める (GDM 208)。Old Ben との毎年のお出逢いの儀式がほどなく幕を閉じるであろうことが暗示される。Lion は Old Ben に飛びつくが、Old Ben は Lion を打

ち倒すことなく、まるで恋人のようにその犬を抱え込んで、どちらも倒れ込んだ。Lionに喉を噛みつかれながらも Old Benは再び立ち上がると、Boon Hoganbeckがナイフを片手に Old Benに跨がり、そのナイフを Old Benめがけて振り下ろす。Old Benの死は、無垢な自然のイメージとは程遠い、知性の片鱗すらも感じられない粗野なBoonによってもたらされたものであり、それは毎年の儀式の終焉だけではなく、森という自然の力が文明社会の野蛮な暴力によって破壊されたことを意味する。

Old Benが絶命すると、その後を追うようにSam Fathersも息を引き取る。Melvin Backmanも指摘している通り、彼はOld Benの死が荒野の死を意味することを見抜いていたと思われる（Backman 140）。Ikeの従兄のMcCaslinは、Samが息を引取る際に傍に付き添っていたBoonに対し、「お前が殺したのか、ブーン。」と聞くと、「もし頼まれれば、おれだってやっていたらからな。」と答える（GDM 243）。Sam Fathersがどのように息を引取ったのかは最後まで明らかにされない。Boonを詰問する従兄と向き合い、Ikeは「彼を放っておくがいい。…畜生。放っておくがいいと言ったら。」と涙を浮かべながら叫ぶ（GDM 243）。この断固とした言葉は、彼が荒野での経験によって物事を冷静に見つめ、自分の頭で思考し、判断を下せる能力を身に付けたことを表している。IkeはOld Benと荒野が文明の暴力的で圧倒的な力の前では全く無力であることを感情的には認めたくはないながらも、理性的にそれを受け入れようとしているかのようである。

Old BenとSam Fathersの死後2年経過した後、Ikeは再びその森を訪ねる。森の伐採の権利は既に北部の業者に売り渡され、製材会社の測量技師が立てた4本のコンクリートの目印が森の中に立っている。その目印は「冬景色のもとではさらに白々として、解体自体が射精、膨張、受胎、誕生の煮えたぎるような混乱であり、死などは全く存在してさえないこの場所では、生命もなく、驚くほど場違い」なものだ（GDM 312）。ただ、Sam

Fathers と Lion の埋葬されている場所は未だ機械文明には侵されないまま残っている。彼は暫くその塚を見守った後その場を離れ、次のように瞑想する。

彼は立ち止まらず、ほんのちょっとためらっただけでその塚を離れた。その塚は死もライオンもサムも存在しない、ゆえに、死者の住居でもないのだ。大地にしっかりと縛りつけられているのではなく、大地の中で自由であり、大地の中に存在するのではなく、大地の一部なのであり、無数のものでありながら、一つ一つの無数の部分は散らばってはいないもの、木の葉も小枝も埃も空気も太陽も雨も露も夜も、ドングリも檜の木も木の葉も、またドングリも、暗やみも夜明けも、また暗やみも夜明けも不変の連続であり、無数のものもまた一つなのだ。オールド・ベンもそうだ。前足でさえ返してもらえらるだろう。そうだ、前足を返してもらえらるだろう。(GDM313)

この箇所では Ike の自然への考え方が巧みに表現されている。Old Ben も Lion も Sam Fathers もすべて自然の象徴であり、死をも超越した普遍性を持っている。自然は畏怖すべき存在であって、破壊すべき対象ではない。自然は過酷で、傷ついた猟犬のように人間さえも危険に晒すことがあるが、大切なのはその自然の秩序を理解することであり、それによって人間の自然での自由が保証される。森に機械文明を持ち込むことはその自然の秩序を破壊する行為であり、その結末は人間の墮落であることを Ike ははっきりと自覚している。

Ike の自然をめぐる瞑想は気違いじみた物音によって打ち破られる。物音のする方角に歩いていくと、彼は Old Ben にナイフを突き立てた Boon Hogganbeck が栗鼠が駆け回る木を銃で叩いている光景を目にする。Boon は Ike に向かって、「ここから出ていけ。こいつらに触るな。一匹だって触

っちゃいけねえ。こいつらは俺のもんだ。」と叫ぶ（GDM 315）。古き良き自然の象徴である Old Ben を殺す行為、および彼の粗野な性格には精神の高潔さは全く見られない。「俺のもんだ」という言葉は、自分がこれから殺す獲物だから触るな、という意味であろう。そもそも彼はこうした小動物を撃つことくらいしかできない小物であり、そういう彼を最後に配置することで、Old Ben や Lion、それに Sam Fathers との際立った対照による悲劇性を作者は目論んだのであろう。

Ike は森での経験から真摯な行動を学ぶが、彼の遺産放棄は果たして真摯な行動と言えるだろうか。Go Down, Moses の中の一つの作品として“The Bear”を組み込む際に、Faulkner は初期形の“Lion”にはなかった、McCaslin Edmonds と Ike との錯綜とした対話を中心とした第 4 章を、他の箇所的大幅な加筆修正と共に書き加えている。対話は土地、黒人と白人、家や南部の歴史、南北戦争、自然にまで及ぶが、この中でも土地と黒人にまつわる話は彼の決心の理由を考える上でも最も重要だと思われる。白人の直系の遺産相続人である Ike は、21 歳になった時、祖父 Carothers McCaslin からの土地の相続を放棄する意向を従兄の McCaslin Edmonds に切り出し、その理由を次のように述べている。

あの土地を放棄するなんて僕にはできない。あの土地は僕が放棄できるような僕の土地だったことはないのだから。放棄できるように遺贈してもらえるような父さんやバディおじさんの土地だったためしだっていないのだから。なぜかという、おじいさんが放棄できるように遺贈してもらえるようなイッケモテユッベじいさんの持ち物でもあったためしがないのだから。なぜかという、祖父や誰かに売るようにイッケモテユッベじいさんに遺贈するようなイッケモテユッベじいさんのお父さんのお父さんの土地であったためしもないのだから。だから

イッケモテユッベがお金と引き換えに土地を売ることができると気づいたとたん土地は永遠に彼のものでも彼の子孫のものでもなくなったんだ。それを買った人は何も買わなかったことになったんだ。(GDM 245-246)

McCaslin EdmondsがIkeに対し、「土地はイッケモテユッベじいさんの息子サム・ファザーズのものになったんだ。お前でなければ誰がサム・ファザーズから引き継いだというんだい。」と尋ねると、Ikeは「そうだ。サム・ファザーズが僕を自由にしてくれたんだ。」と答える (GDM 286)。Ikeが手に入れた自由とはいったい何からの自由なのか。

Ikeは自分が相続するはずの土地の売店で一冊の台帳を見つける。台帳には、祖父 Carothers McCaslinが黒人奴隷 Euniceに産ませた娘 Tomasinaとの近親相姦の罪を犯し、彼女の母親 Euniceがそれを苦に自殺した記録が残っている (GDM 257)。それを記したIkeの父親 Theophilus “Uncle Buck”の字は句読点や文章の構成には全く気を使っていない。子供に対して支払われる1,000ドルの財産も祖父の資産から支払われるのではなく、息子たちが父親の資格を欠いているという理由から罰金という形で支払われることになっている。まるで要らなくなった帽子か靴でも投げ捨てるように、軽蔑するように与えた。Ikeは「黒人に我が息子と呼ぶよりも、きっと安くついたんだな…たとえ息子の名前がたった2語だったとしてもそうだったんだ。でも愛はあったはずだ。」と考える (GDM 258)。Ikeの性格を考えれば、台帳に目を通したときに白人として良心を圧迫されるほどの心の痛みを感じたはずである。Ikeは自分の家系の墮落や腐敗を「呪い」と考え、その「呪い」を永久にこの土地から払拭するために遺産相続放棄を決心し、更にIkeの遺産相続放棄に反対する妻との肉体関係をも拒否する。

Ikeの考え方と行動に矛盾はないだろうか。Ikeは荒野での狩猟体験によ

り、勇気、自由、誇り、謙譲といった人間としての美德を学び取っている。荒野では自然の掟や秩序に従い、自分の頭でものを自由に考えて行動するという経験を積んだはずである。しかし、彼はその美德を実社会で実現しているとは決して言えない。もし彼が善と悪とを積極的に自分の行動で示すことができるとすれば、遺産を相続した上で自らその呪いを家系から払拭しようと努めるはずであり、それが彼が荒野から学んだ自己を実現することになる。Lynn AltenberndはIkeが見いだした真実とは、土地を人間が所有することができないことであり、Ikeはこの信念によって開放されたと述べている (Altenbernd 579)。確かにIkeは開放されたが、彼が台帳に見いだした祖父の罪は決して消えることはない。しかし、彼の遺産放棄は決して積極的な解決策ではあり得ないが、奴隷制度のもとの白人優位や家系の尊重という南部社会が抱えてきた問題からの自由を体現するものとして、評価できるのではないだろうか。彼の抱えている矛盾は「荒野と文明」と「奴隷制度」が抱える矛盾そのものであり、まさに相互の圧倒的な力が相容れることなく存在している南部の歴史そのものである。彼の孤立はその歴史の集約の必然的な結果なのである。

V

人間社会の営みが人間関係に基づいたものだと考えると、個人の‘isolation’の存在はその社会が多かれ少なかれ何らかの問題を孕んでいることの現れと言えるのではないだろうか。‘isolation’と言うときに、その性格や原因はその状況に置かれた人たちによって様々である。*The Sound and the Fury*のQuentinは過去から現在に至る時間の流れと現在という瞬間を融合させることができなかつたがために、自殺以外の道を選択できなかつた。それは南北戦争を契機に噴出した、奴隷制度に基づいた南部社会の抱える

矛盾であり、Quentinの自己矛盾の原因もそこにある。*Light in August*のJoe Christmasは、南部の人種差別の中で厳格な宗教によって育てられた過去と自分の間で揺れ続け、自分のアイデンティティを希求したが、逆に破滅的な結末に終わってしまった。*Go Down, Moses*のIke McCaslinは家系の「呪い」を払拭しようとして自分を解放したが、結局は理解者は得られないまま孤立してしまった。

Ikeが葬ろうとした「呪い」は実は南部社会全体の問題でもある。FaulknerはVirginia大学で南部の呪いについての質問を受け、次のように答えている。

その呪いとは奴隷制度のことで、それは堪え難い状況です。どんな人も奴隷にされてはならない。南部は努力してその呪いを取り除かなければならない。そっとしておいてもらえば南部がそれをするでしょう。それを強制されてはなりません。自分の意志と願望でそれをしなればならない。そっとしておいてくれたら、南部が自分でやると確信しています。(Gwynn and Blotner 79-80)⁴

この南部の呪いのテーマは、Faulknerの主要な作品に共通にみられるテーマだが、それは作品に設定されている時代の南部社会が依然としてその影響から免れていないことを表している。今まで言及した作品の登場人物たちが‘isolation’に陥る原因は、個別的な違いこそあれ、奴隷制度を擁護し、アメリカ全体からも孤立してきた南部社会の宿命とも言えるものである。Faulknerが南部の行く末をLena Groveの未来への希望に託したのか、それともその行く末はQuentinやJoe Christmasの死に象徴されるように、全く絶望的なのかどうか。いずれにせよFaulknerの作品が提起している「人種問題」、「宗教と人間」、「自然と人間」、「孤独や孤立」と言った問題は、現代

に生きる私たちにとっても避けては通れない普遍的なテーマである。

註

¹ 因みに *OED* は ‘lonely’ を “1. a. Of persons, etc., their actions, condition, etc.: Having no companionship or society; unaccompanied, solitary, lone. 4. a. Dejected because of want of company or society; sad at the thought that one is alone; having a feeling of solitariness.” と、‘solitary’ を “1. b. Keeping apart or aloof from society; avoiding the company of others; living alone.” とそれぞれ定義している。

² Faulknerの作品からの引用はそれぞれ *The Sound and the Fury* を *SAF*、*Light in August* を *LIA*、*Go Down, Moses* を *GDM* と表記する。

³ 古くから熊は自然の一部として尊敬や崇拝の対象になってきた。*The Golden Bough* には日本のアイヌ民族が古くから行ってきた「熊殺し」の記述がある。アイヌ民族は熊を ‘kamui’ として崇拝する一方で、食用のために熊を殺す場合もあった (Frazer 505-18)。しかしその際にも熊への敬意を忘れずに、崇拝の儀式を行っていたようだ。ただ “The Bear” で行われる熊狩りはヨーロッパ人がアメリカに持ち込んだハンティングの伝統であり、太古の狩猟生活時代の男性の役割がその後男らしさの誇示に結びついたスポーツ的なものであり、生存のための狩りとは意味合いが当然異なる。

⁴ Faulknerは南部を作品の中で風刺する理由と南部に対する思いを問われ、自分の故郷への思い入れについて次のように答えている。「南部は私の故郷であり、生まれ育った土地であり、わたしはそこを愛しています。わたしは風刺しようとしているのではなく、つまり考えていることをわたしが語る物語の中で表現したり、人々のことを語っているだけなのです。そしてこれらの人々は自分の思いを表現しますが、わたしの考えの場合もあるしそうでない場合もある。けれどもわたし自身はわたしの故郷を風刺しているのではない、むしろ愛しているのです。欠点があってそれを直そうとしている。しかし物語を書いているときは直そうとは思いません。その時点では人々について語っているのですから。」 (Gwynn and Blotner 63)

引用文献

Altenbernd, Lynn. "A Suspended Moment: the Irony of History in William Faulkner's 'The Bear.'" *Modern Language Notes*, 75 (November, 1960). 572-82.

- Backman, Melvin. "'The Bear' and *Go Down, Moses*." *William Faulkner: A Collection of Criticism*. Ed. Dean Morgan Schmitter. McGraw-Hill Company, 1973. 136-46.
- Bleikasten, André. "*Light in August*: the Closed Society and its Subject." *New Essays on Light in August*. Ed. Michael Millgate. Cambridge: Cambridge University Press, 1987. 81-102.
- Cowley, Malcolm, ed. *Writers at Work: The Paris Review Interviews: First Series*. Penguin, 1977.
- Faulkner, William. *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage International, 1990.
- . *Light in August. The Corrected Text*. 1932. New York: Vintage International, 1990.
- . *The Sound and the Fury. The Corrected Text*. 1929. New York: Random House, 1984.
- Frazer, J. G. *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*. 1922. Macmillan, 1990.
- Gwynn, Frederick L. and Joseph Blotner, eds. *Faulkner in the University*. 1959. Charlottesville and London: The University Press of Virginia, 1995.
- Sartre, Jean-Paul. "Time in Faulkner: *The Sound and the Fury*." *William Faulkner: Three Decades of Criticism*. Eds. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery. A Harbinger Book, 1963. 225-32.